

がん治療「PET—CT」

早くも大きな効果

製鉄室蘭病院カンファランス



「PET—CT」の効果などについて理解を深めた医療連携カンファランス

別や進行度合いの推定、がん転移の判定が容易になる—など、早くも大きな効果を発揮している。カンファランスには、西胆振の医療関係者ら100人が出席。志賀准教授は、がんを体内に持っている状態（担がん）の患者について、「CTと

PET画像を並べて読影するより、（PET—CTによる）融合画像を利用すると、さらに10%の診断精度の上昇が認められた」などとするデータを示した。

出でる」 「がんのステージングや診断には有用—などと解説。出席者もPET—CTの効果や「脳や心臓にも適応があり、数年以内に、新しい薬剤の臨床応用が可能になる」などとした今後の展望説明に、真剣に耳を傾けていた。（松岡秀直）

製鉄記念室蘭病院（松木高雪病院長）の医療連携カンファランスが、室蘭市知利別町の同病院で開かれ、北海道大学大学院医学研究科病態情報学講座の志賀准教授が、陽電子放出断層撮影装置（PET）とコンピュータ断層撮影装置（CT）を一体化した「PET—CT」装置を通じた、がんの転移再発診断や治療効果判定の現状などを解説した。

同病院は、がん診療センターに「PET—CT」装置を導入し、昨年12月から稼働させた。「PET—CT」による検査・診断によって、がんの早期発見、良性と悪性の区